

## 修士学位請求論文要旨

論文題名 中国の漫画誌『知音漫客』の変遷について  
所属研究科名 国際日本学研究科  
専攻名 国際日本学専攻  
研究領域名 ポップカルチャー研究領域  
学生番号 4911211008  
氏名 カク 杰琳

本研究は中国の漫画誌『知音漫客(中国語発音：ジーインマンケ／日本語読み：ちいんまんきゃく)』の変遷に関する研究である。『知音漫客』は2006年1月に創刊されて以来、2023年10月まで、湖北知音伝媒集団により継続的に刊行され続けていた。

『知音漫客』は、青少年の男女双方を対象とするA4判のオールカラー漫画誌で、中国オリジナル漫画によって内容が構成されている。湖北知音伝媒集団の親会社である知音伝媒集団は女性向け生活情報誌『知音』を発行しており、その「知音」のブランド力もあって『知音漫客』は創刊当時から広く知られ、中国全土の書店とニューススタンドで販売されてきた。

『知音漫客』の内容は主に漫画、コラム記事、そして「辺欄」と「底欄」によって構成されている。「辺欄」と「底欄」は、漫画が掲載されているページの欄外スペースの呼称である。「辺欄」は見開きの左右の小口部分に沿って幅3センチ程度、「底欄」は下端部分に沿って高さ2センチ程度で設けられているスペースを、それぞれ指す。「底欄」には主に読者からの友達募集のための個人情報に掲載されてきた。「辺欄」の内容は大きく3種類に分けることができる。読者からの作品に対する感想や同人イラスト・短文小説などの投稿、編集者による読者の見聞を広めるための記事、そして読者の質問や悩みに対して編集者や漫画家が返信をする対話記事である。それら3つが順繰りに「辺欄」に掲載される形をとってきた。

『知音漫客』は2006年の創刊当初ギャグ漫画を中心としていたラインアップを、2008年前後からファンタジー作品やストーリー重視の作品を中心とする形へと変化させている。併行して、掲載される女性読者からの投稿が、男性読者からのそれを数で上回るようになっていく。

この雑誌は創刊以降、人気を博して部数を伸ばし、2012年には月間発行部数が520万部に達した結果、中国においてもっとも発行部数の多い漫画誌になった。とりわけ2010年代における中国の漫画文化をとらえる上で、代表性が高い雑誌と位置付け得ると考える。同誌を対象とし、その変遷を研究する所以である。

先行研究及び予備調査を踏まえ、以下の仮説を立て、これを検証した。

- ① 『知音漫客』は創刊当時、既存の子供向けの漫画誌の潮流に倣い、ギャグ漫画をメインとする編集方針をとり、編集部からの希望に基づいて漫画家はギャグ漫画を連載していた。また編集部は読者とのコミュニケーションの場として「辺欄」と「底欄」を設けた。
- ② 2008年前後、『知音漫客』は読者対象として少年よりも青年層に重きを置く方向に編集方針を変え、ギャグよりもストーリーに重きを置くファンタジー漫画を重視するようになった。また、連載漫画家の増加により、人気投票を基準に作品の存続を決める『知音漫客』では、作品の間の人気をめぐる競争が激しくなった。その漫画家たちが、ファンタジー漫画が青年読者に好まれていると認識したことも、ファンタジー漫画の増加の一因となった。加えて、投票する読者の大半が女性であると見受けられたため、女性読者の意向が漫画家に強く意識されるようになった。
- ③ 2016年前後、インターネットの普及とともに、紙媒体から読者が離れていった。このような状況を背景に、読者を引き留めるために、『知音漫客』編集部はメディアミックス展開やその広告によって、掲載作品の読者へのアピールを多角化するようになった。

『知音漫客』は、2006年から2014年までは李靖氏が、それ以降から現在までは陳婧氏が編集長を務めてきた。この2名の編集長経験者から編集方針の変遷やその背景を取材することを試みた。また編集部の方針や読者からの投稿などが連載漫画家にかかに伝わり、受け止められ、そして作品に反映されたのかに関わる仮説の側面を検証する上で、2006年の創刊から2019年までの期間に『知音漫客』に連載してきた漫画家のうち、中国版のX（旧ツイッター）であるSNS、Weiboでアカウントを持ち、本人であることを確認できた漫画家58人に取材することを試みた。

しかし、2006年の創刊から2014年まで在任していた前編集長には取材がかなわず、また現編集長から得られた証言の内容も限られていた。他方で、取材がなかった8人の連載漫画家からは、編集部関係者に取材しようとしていた内容の大きな部分を補う証言が複合的に得られ、これを用いて仮説の主要な部分を検証した。

2006年の創刊初期に連載開始した漫画家からは、当時、『知音漫客』編集部は既存の大手漫画誌に倣い、ギャグ漫画をメインに位置付け、既存の有名な漫画家や漫画スタジオと提携して作品を制作しながら、自誌に連載する漫画家にギャグ作品を制作するように要請していたという証言が得られた。また当時から「辺欄」と「底欄」が読者とのコミュニケーションの場を担っていたという証言も得られ、仮説①は裏付けられたと判断する。

2008年前後から『知音漫客』はギャグ漫画からストーリーに重きを置くファンタジー漫画が雑誌のメインジャンルとなる形へと方向を変えたが、その要因については漫画家によって見解が分かれる一方、漫画家による読者の好みへの訴求という要因については否定的な証言が複数得られた。また、当時の『知音漫客』編集部が「新人王」というコンテストを設けるなど新人漫画家の育成に力を入れ、連載漫画家が増加した結果、作品の人気競争の激化が実感されたことについては、複数の肯定的証言が得られた一方、その結果として漫画家たちが人気投票をそれ以前より重視するようになったとする仮説の部分については否定的な証言が得られた。以上から、仮説②のファンタジー漫画の増加の要因に関わる部分は否定されたと判断する。他方、この時期から投稿者に占める比率が高いと見受けられた女性読者の意見を重視するようになり、女性読者を強く意識して作品を作るようになったとする証言が複数得られ、仮説②の女性読者の影響に関わる部分は裏付けられたと判断する。

また、インターネットの普及を背景に『知音漫客』編集部が誌面に占める漫画の面積を拡大し、オンラインでの同時連載などをはじめとした対策を取り、掲載作品をより前面に打ち出そうとしたことについては、2014年に就任した現編集長の証言が得られる一方、そこに紙媒体から離れていった読者を引き留める意図が絡んでいるかどうかに関わる証言は得られなかった。結果仮説③は、インターネットの普及と掲載作品のアピールの多角化との関係に関する部分については裏付けられたと判断する。

今後、『知音漫客』の変遷についてさらなる研究を進める場合、前編集長の李靖、および記事を担当した編集者や広告の担当者に対する取材が要になると考える。